

子牛の経口電解質液の与え方

成分と作用

人でいうスポーツドリンクと似た成分でできています。下痢の時は、水分や電解質（ナトリウムイオン、カリウムイオン、重曹イオン）が子牛の体から排泄され、体液が酸性に傾いてしまいます。経口電解質液で、この不足する水や電解質を補ってやります。

使用上の注意点

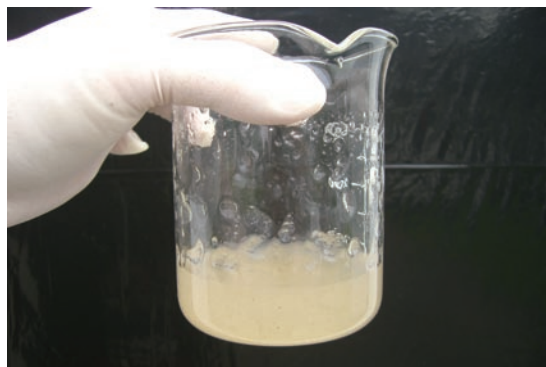
電解質製剤を溶かす水の量を間違わないことです(製品ごとに違ってきます)。電解質液は、子牛の体液と同じ濃さになるように作られています。そのおかげで胃腸での吸収が良く、負担がかかりにくい特徴があります。電解質液が濃かったり、薄かったりすると吸収されやすい特性が失われてしまいます。また下痢止め薬を電解質液に混ぜずに与えた方が、電解質液の濃度が変わらないので、吸収されやすいでしょう。

断乳（ミルク給与の中止）と電解質液

断乳は腸粘膜を休ませる良い方法です。その場合、ミルクの代わりに、電解質液を与えますが、栄養価が低いため、投与期間は1～2日に限定することです。それ以上の断乳は子牛の体力を弱らせてしまいます。下痢が慢性化した場合には、ミルクの投与量を減らし、複数回与えてやります（例えば100～200ccのミルクを4時間おきに数回与えるなど）。こうすることで胃腸の負担が少なくなります。電解質液もその合間に与えますが、ミルクと混ぜるのではなく単独で与えます。ミルクと混ぜては、レンネット（凝乳酵素）の働きを阻害するので、消化を遅らせ、胃の負担が増えてしまいます。また、ミルクの投与から十分な時間を空けて投与しなければ、胃の中で未消化のミルクと電解質液が混ざってしまいます。経験上、ミルク投与から最低2時間は空けて、電解質液を投与しましょう。

電解質液の投与量

下痢の時は、電解質もミルクも子牛が飲みたい以上に与えないことです。お腹がふくれ、ゆするとタプタプする時には、前に与えた物を消化できていません。新たな液体を与えると、病態を悪化させることもあります。



← 水に溶かすとゼリー状の液体となる電解質製剤も市販されています。どうしても下痢が止まらないときに使うと、便が硬くなり、便利ですよ。

次は、鶴居家畜診療課の三浦彬江さんにバトンタッチします。

(鶴居診療課 茅先 秀司)